

新・鬼師の世界

— 周縁の再中心化：ポスト・「鬼滅の刃」と「鬼師」 —

(株) 伊達屋 — YUHIRO III.

高 原 隆

「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションが2020年10月30日から2021年1月29日にかけて行われた。(株)伊達屋のYUHIROもこのコラボに積極的に参加した。その様については、「YUHIRO I.」(高原2023-1)と「YUHIRO II.〔I〕」(高原2023-2)及び「YUHIRO II.〔II〕」(高原2024)に詳細に述べている。ここでは、視点をできる限り現在(2023年)へ向けて、「ポスト・「鬼滅の刃」と「鬼師」と銘打ち、YUHIROの「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション以後、YUHIROがどのような軌跡を描いて来ているのかを辿ってみたい。もちろん、現場は常に進行しており、文書の形で追いかけるのは無理があるのは事実である。ただ、大まかな方向性を見ることが可能であり、ここにYUHIRO III.として概略的な流れとその意味について考察してみたい。

ジブリパークへ

2021年8月6日に(株)伊達屋にあるYUHIROを訪れた。目的はもちろん、「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションにYUHIROがどのように関わって行ったのかについて、YUHIROを運営する伊達映見、伊達由尋の親子に会い、話を聞いたのである。インタビューは3時間余りに及び、話が進むにつれて、熱気を帯びるものになり「鬼

滅の刃」とのコラボにおけるYUHIROの姿が浮かび上がって行った。そして、終わり辺りには、それまでテーブルに座り、相手を見ながら互いに話していたのが、いつしか立ち上がって、しかも、歩きながら話していた。その場所が、「鬼滅の刃」と「鬼師」による体験コラボが行なわれてたYUHIROの作品展示室だったのである。つまり、展示室に飾られているYUHIROが制作した名場面プレートをそれぞれ見せてもらいながら、制作した本人である映見と由尋から直接に名場面プレートにまつわる話を興味深く聞いていた。(図1)その部屋を反時計回りに移動しながら、一方、心の片隅で、テーブルコーダーのテープに二人の声がはっきり入っているかと、若干、ハラハラしながら(それほどテーブルコーダーのマイクからは離れてしまった)、時計で言う、6時の位置から始まった移動は、やがて12時の位置まで来て、頂点に達した。6時から12時の間の壁には、名場面プレートがびっしりと飾ってあった。

ところが、12時を境にして、いきなり「鬼滅の刃」が消え、何と、それまで見たことも無い、期待もしていなかった、異空間が現れたのだった。エッとウァーが同時に口を吐いて出て来た。宮崎駿のジブリの世界がそこに在った。アニメオタクではないが、「ルパン三世」や、「風の谷ナウシカ」、「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」などは多少なりとも



図1 インタビュー中 (YUHIRO 展示室にて)

知っていたし、漫画やアニメも見ていた。

高原： これはスゴイですね、でも…。

これが私の最初の言葉であった。それほど、「鬼滅の刃」との落差が大きかった。「鬼滅の刃」だけで、十分過ぎるほど感動していた矢先の出来事だった。(図2) 映見が次のように答えている。

ちょっと、今、考えてるだけで、構想できてないのが、「鬼滅でこういうのを作って、自分たちでこういう技術が伴った」と思ったんで、ここはジブリさんも作ってるんですけど…。

ジブリさん、ジブリパークが愛知県、出来るじゃないですか…。来年か何かに始まるんで…。そこで、「瓦のジブリの絵を出来れば飾っていただけないか」と思って、作っていただけてるんですけど…。

映見がこの時に語っていたジブリパークは既に2022年11月1日に愛知県長久手市の愛・地球博記念公園内に開設されている。元々は、2005年3月から9月にかけて行われた万国博覧会場の跡地であり、愛知県知事の大村秀章が、ジブリ社に「ジブリの世界観を永続的に楽しめる施設を作りませんか」と提案したのが発端となっている。(ja.wikipedia.org/wiki/ジブリパーク)

その後、ジブリパーク建設計画は順調に進み、2020年7月28日には工事の起工式が行われている。つまり、2019年の末ごろから流行り出し、やがて世界へと波及して行った武漢ウィルス・パンデミックを尻目に、ジブリパーク建設は着々と進められていたことになる。そして、映見も、ちょうどほぼ同時に始まった愛知県高浜市での「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションの準備に取り掛かりながらも、ジブリパーク建設の話も見逃さなかったのである。

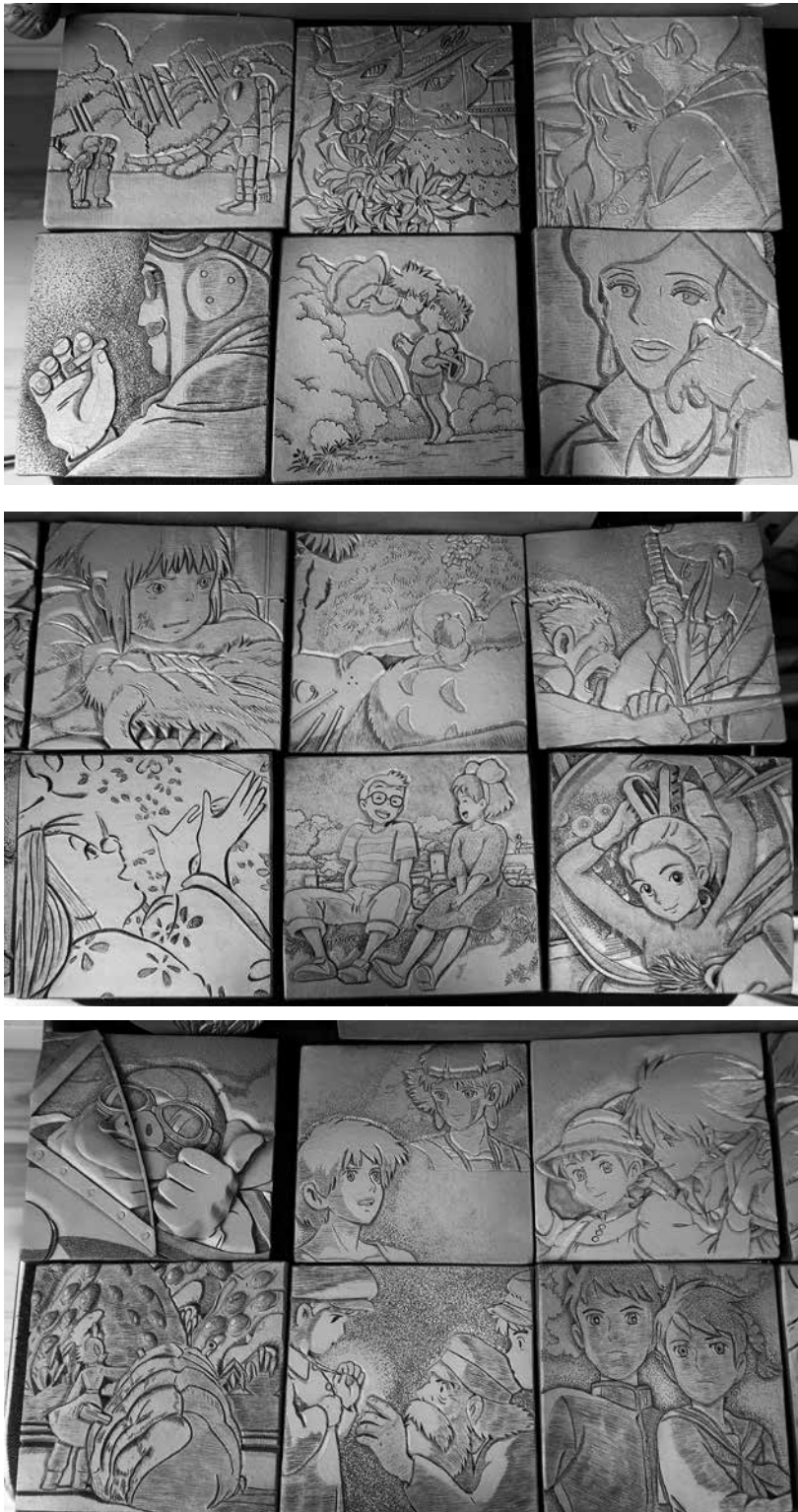


図2 ジブリ・プレート群



図3 華やぎⅡ 伊達由尋作 かしら (鈴羊の家：書庫、個人蔵)

2022年12月13日にまた(株)伊達屋を訪れた。YUHIROに注文した鬼瓦「華やぎⅡ」が完成したとの連絡を受けて、鬼瓦を受け取りに出掛けたのである。自宅がある岐阜県恵那市からは愛知県高浜市にある伊達屋まで車で3時間弱ほどかかる。その為、単に鬼瓦を受け取り、支払いするだけでなく、更なるフィールドワークを行う事がよくある。そして、YUHIROで「華やぎⅡ」を見届けた後、いつものインタビューへと入って行った。(図3)

すでにこの時は、ジブリパークは開園しており、入場券は抽籤で、しかも手に入れるのがかなり困難であるという話が巷に流れていた。この話を耳にして、ふっと「鬼滅の刃」の体験コラボの事を反射的に思い出した。体験コラボもチケットが抽籤で、極めて入手困難だったのである。また同時に、「日本は世界に冠たるアニメ大国なんだなあ」とも思った。多くの国民の圧倒的な支持が存在するか

らである。この支持なしには、チケットの抽籤騒動など起こり様がない。そうした事を背景にしながら、インタビューは始まった。話を切り出したのは私であった。

前に話されてたジブリパークの話なんですけど、どういう風になりました？あの、名古屋で、ジブリパークが出来て、それで、鬼滅の刃の時に作られてたじゃないですか。それで、あの、実際に、あの、「出来たら展示されたらいいな」って希望を持たれてたんですけど…。それはどういう風な動きになりました？

映見はこの問い掛けに、ズバリ次のように答えたのだった。

それは全部貰われて行きました。

「えーっ！」と反射的に言葉が出るのを止

められなかった。映見はもう一度少し言葉を変えて言うのだった。

今はジブリパークに全部あります。

つまり、映見の夢が実現したことを意味していた。すでに YUHIRO では「鬼滅の刃」が終了したことを受けて、次の段階へと移行していた。正に、ポスト・鬼滅の刃的状况が現場では展開していたのだ。もっとも、最初にジブリの「名場面プレート」を紹介されたのは、2021 年 8 月 6 日であるから、「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボが終了した 2021 年 1 月 29 日から少なくともほぼ 6 か月後には、ジブリのプレートが完成していたことになる。この事実一つを取っても、YUHIRO は未来志向型の鬼板屋であることがわかる。そうした事を胸に秘めながらも、映見にどのようにして、あのジブリ・プレートがジブリパークへ移って行ったのか聞いてみた。映見はそれに次のように答えている。

うちとしては、あの一、作るだけ作って、全部で 32 枚かな。絵を作らせていただいで…。で、作ったものをずーっとここに(展示室)置いてあったんですけど…。

それを見て下さった高浜市さんの方だとか、見て下さって、あの一、「すごく良いよ！」って。「これ、こんなところに眠らせ

「瓦で、こんなに絵が出来るものなのかってのも知ってもらいたいから、これを何と

で、あの一、もちろん、「繋げて頂いたら、プレゼントという形で全部あげてもいい」と言ったんですよ。

そしたら、いろんな、うまく繋がりを使得たのか、あの一、繋げて下さいまして、…はい。最後には、宮崎吾朗（宮崎駿の長男）さんにちゃんと、直接、お渡しして来ました。

「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボの時もそうであったが、高浜市がその時と同様に、二者「ジブリ」と「鬼師」(YUHIRO)の仲介の労を陰ながら取ったことになる。

高浜市さんはもちろん貢献して下さいましたし…。多分、高浜市さんからジブリに直には行かないんで、間に、多分、いろんな方が入って下さって、最終的にジブリさんと繋げて頂いて…。

そして、実際に「ジブリ」と「YUHIRO」が直接に会うことが起きたのである。なかなか、「やって見ろ」と言われても、やれるものではない出来事であった。映見の言葉が続く。

ジブリさんの方から一人、ジブリの偉い方がいらっしゃって、その、作品を全部見て下さって、…。で、「素晴らしい作品で、是非、自分の方としても欲しいです」って言って頂けたんで。

ただ、寄贈って形だと、いろいろと、これからも「寄贈したい」って方が見えてしまうといけないんで、「寄贈とは言えない」という風に…。

ただ、こういうのを寄贈？プレゼント？…、何て言ったらいいんですかね。うちとしては、「全作品、あげますんで、好きなように使って下さい」ってして、お渡しはしました。

移譲の形はともかく、この様にして、ジブリ・プレートは譲渡されたことになる。受け渡しはジブリパークで、直接、宮崎吾朗の立会いのもと、行なわれている。その様子は映見が語っている。

本当に、吾朗さんも、お渡しした時に、(ジブリ・プレートが)並べてあるのを一所懸命(写真に)撮って、もう、凄い喜んで下さったみたいで、出来れば、あまり人に触れさせたくない。(笑)触ると、油が付いてしまったり、汚れが出てしまったりとか…。

なかには、すごい軽い考えのスタッフなんかもいて、「これ、トイレとか飾ったらいいじゃん」って言ってる方いらっしゃったんですけど…。

もう、吾朗さんが、「いやだ。絶対、嫌だ」。「事務所の中に飾りたい」。「でも、…中だと誰も見てくれんしなあー」。(大笑い)

ただ、映見から話を聞いた時、「本当に、宮崎吾朗と会ったのですか」と念を押してみたのは事実である。

娘(由尋)が(吾朗さんの)近くにいたんで、娘と話してたんで…。もう、私が見た吾朗さんは、向こうの一番有名な階段のところに全部作品(ジブリ・プレート)を並べて、それを必死に写真撮って、「わーっ、凄いな、凄いな」って、ズーっと口の中で、ほめて、ホメて、褒めて、くれるので、「有難うございます」って…。

スゴイ…、気に入って下さったみたいで…。吾朗さんて、普段からどちらかというと、冷静沈着で、あまり感情表現されない…方みたいなんですけど。パークの方と後でお話すると、「吾朗さん、目茶、目茶、喜

んでましたよー」って。

そういう風には見えなかったけど…。あの方があんだけだから、…すごい喜んでました。

ジブリパークの主権者側の中心人物に喜んで貰えたことは、YUHIRO のジブリ・プレートが鬼滅の刃での名場面プレートとほぼ同等の力を発揮したことを意味している。真の目利きの審査に合格したと言えよう。ただ、YUHIRO 側の想いは別のところにあった。その思いについて映見は語るのだった。

出来れば三州瓦を知ってもらう切っ掛け。「これって、なーに？」って。「すごい！この絵って、なんで出来てるの？」って、…思った時に、「三州瓦だよ」と話になってほしいんですよ。

それが切っ掛けだったんで、私が作る。で、それに対して、娘が賛同してくれて、「じゃ、私も作る」って。で、作ってくれたような感じで、これだけのものが出来たものですから…。はい。

だから、出来れば、三州瓦が表に出る切っ掛け。「三州瓦って、ただ屋根に載ってるだけじゃなくって、こんなことも出来るんだよ」って。「鬼師の技術って、こんなことも出来るんだよ」っていう事を知っていただきたい。

…というのが(作る)切っ掛けだったものですから。

では、ジブリ・プレートはどのように作られて行ったのであろうか。もちろん、鬼滅の刃の「名場面プレート」が下敷きにあるのは確かであるが。映見がジブリ・プレートの制作過程を話してくれた。



図4 ジブリ・プレートⅠ



図5 ジブリ・プレートⅡ

これは（ジブリ・プレートの絵）ジブリさんが、「一つの映画、作品に付き、55枚使っていていいよ」って、出されているんですよ。「非営利だったら、何に使ってもいいよ」って出されてて…。はい。それが表に出てるんで、その絵しか使ってないです。

向こうからOKが出たもの以外は使わないです。向こうの方にもそれはお話ししました。

次に、映見と由尋がどういう風に絵を振り分けて行ったかについて、やはり映見が語る

のであった。

あの一、まず、絵を出して来て、それを印刷して、印刷したものを元絵に作って行くんですけど…。何枚か印刷していて、「あっ、これ、私作りたい」。「これ、私作りたい」って感じですね。

だから、本当に、あの一、別に誰かどれかじゃないといかんという話はなかったんですけど。娘が「これ、作りたい」って言うのと、「ああ、それ、作りな」って。紙渡すと、作るというんですかね。…っていう感じですね。（図4、図5）

側で聞いていた由尋が、ここで口を開くのだった。

私は、ま、その、まず見たことがあって、どうゆう内容で、どうゆうキャラクターかっていうのが分かってないと、その、何て言うんでしょ、形を作りにくいというか、雰囲気を出しにくいというか…。

…のが、あるので、見たことがあって、どうゆう内容が知ってて、自分の好きな作品で、そこに気持ちが込められるものであってというのと…。あとは、えーと、私の場合、立体に作りたかったので、ある程度立体にした時に作りやすいとか…。

あの一、手が込んでて、自分で作ってて楽しくなりそうな形のものというのを選びました。

由尋は「作る中で、自分の心が動くものっていうので、いつも作って行くので」と述べている。自分自身の心の動きが重要な物差しになっている。映見も由尋の側でいつも見ているので、次のように証言している。

この人の言い方で言うと、「作ってて楽しくなかったら、作りたくない」…感じですね。いつも言いますよ。

「作ってて、楽しくない」って。なんか、お客さんから作って下さいって、頼まれたんだけど、自分が作りたくないものだと、ずーっとそう言いながら、「楽しくない、楽しくない」って言いながら作ってますね。

ところが、逆の状況になると、由尋は態度が一変するのだ。

逆に自分が作りたいものを作れた時には、もう乗ってしまうんで、もう、夜でも、「帰るよー」って言ったたら、「いい、おいってって」、「私、歩いて帰るから」というぐらい。

もう、乗って来ちゃうと、そういう感じですね。全然帰って来ないけど…。下手すると、帰って、ご飯食べると、また行っちゃって、一時まで帰って来ないとか…。

この性癖は、^{まさ}しく「鬼師」の姿そのものである。他の鬼板屋でも、似た話をよく聞いて来たので、鬼師の血が色濃く流れているのは確かである。また、やはり、プロの鬼師なので、「楽しくない」からやらないわけではない。

楽しくないものの中にも、楽しいものを見つけるので、やってくうちに、「あ、ここ、ちょっと楽しくなって来たな」って言ってやったりとか…。そうやって来ると、自分の気持ちが入って来るので、最終的には作品としては全部気持ちが入るんですけど。でも、入ってる度合いっていうのは変わって来ますね。

正に、波に乗るサーファーを地で行っているのが由尋である。では、なぜ YUHIRO がジブリを鬼滅の刃の次に選んだのだろうか。偶然は無いというが、YUHIRO の場合は、いろいろの要因が重なったところにうまく立ち会うことが出来たからだと言える。映見は次のように答えている。

鬼滅の刃を通して、「あっ、私、絵を彫ったりというのが出来るな」っていうのが分かったんですよ。

もちろん、鬼滅があったから、ジブリの絵を彫ろうという感じに思っ、で、そのタ

イミングで、ジブリさんが、じゃあ、「一つの作品に付き、55枚無料で配信しますんで、好きなように使って下さい」って発表されたんで…。

由尋はこの時、「50枚じゃない？」と口を挿んでいる。一方、映見は枚数の違いには構わず、続けてジブリの絵のジブリ・プレート化の話へと入って行くのだった。

50枚だったっけ？ 50枚かな？で、それで、じゃあ、「それを使って、絵を彫りたい」って言って、一枚彫り、二枚彫りってやってたら、だんだん増えて行って…。

「折角ここまで来たんだったら、丁度ジブリパークも出来るし、プレゼント出来るといいなあー」って思いまして調べたら、ジブリさんの方、プレゼントとか、まあ、言ってみれば、「寄贈とかは一切受け付けてません」って出たんで…。

じゃ、もう、「自分とこの工房に飾るだけでもいいや」って。もう彫ってるのが、楽しかったんですよ、ジブリさんの作品は。で、ドンドン増えて行った。で、ここに飾ってあったんですけど…。

その飾ってあったジブリ・プレート群を2021年8月6日にYUHIROを訪れた際に、運よく見ることが出来たことになる。映見は別の角度からも、どうしてジブリ・プレートが増えて行ったかについて言及している。鬼師ならではの仕事の特徴が浮かび上がり、興味深い話である。

今、ちょっと仕事のパンパンなんで、今、出来ないですけど…。私たち、鬼師ってのは、仕事にすごく繁忙期があったりとか、全然仕事が無い時期とかあるので、その仕

事の無い時期に、何か片手間にやってたりとか…。あとは、仕事が終わってから、「一時間だけ、今日は彫って行こうかなあ」って言って、やっぱりとかい^{たま}うので、溜^{たま}ってった感じでした。

絵を彫る

YUHIROのスゴイところは、鬼滅の刃とのコラボで、創り出した「名場面プレート」（高原 2023-1）から、「ジブリ・プレート」へと発展させ、そのジブリ・プレートも、ジブリパークへと移ったことにより、（株）ジブリパークとのある意味で表には出ないコラボが展開している事だ。正に、ポスト・鬼滅の刃と鬼師のコラボそのものである。ところが、YUHIROはさらなる新企画を展開していた。それが「絵を彫る」である。

まず、YUHIROを通底音の様に流れている「絵を彫る」がある。その一つが、鬼滅の刃とのコラボで生み出された「名場面プレート」が、何と今もって続いている事である。「オタクの、オタクによる、オタクのための」名場面プレートに、オタクが現在もなお、声援を送っているのだ。YUHIROにおけるポスト・「鬼滅の刃」と「鬼師」現象が起きていた。映見の声を聞いてみよう。

今だに（2022年12月13日）、鬼滅の刃のファンの方とか、「伊達さん、またなんか新しい作品彫ってよ」って、お金に関係なく。

「趣味で彫るものはお金にならないな」と思うんですけど、そんな感じで言われると、「まあ、何か彫ってみようかなあ」って、二枚、新しく彫ったんですけど…。

何しろ、YUHIROの工房兼展示室には沢山の作品が飾られているので、余程の目利き



図6 名場面プレート：煉獄杏寿郎



図7 名場面プレート：宇髄天元

で、通い慣れている人でないと、何がどこにあり、どうなっているのかはわからない。映見の話を呼び水に、新・名場面プレートを見せてもらった。

どうぞ、どうぞ。丁度、その鬼滅の刃のクラブが終わりまして、終わった後に彫ったのがこの二枚です。

煉獄さん（炎柱・煉獄杏寿郎）と、宇髄天元さん（音柱・宇髄天元）。こちらが無限列車編で、こちらが吉原編ですね。ま、出来れば、次は第3弾が始まる、いや第4弾か…。一番最初があって、無限列車があって、宇髄さんがあって…。(吾峠 2017)

私は彫って楽しいんで、いいんですけど、一切お金にならないんで…。そして、そういうファンの人が又写真を撮りに来るという感じですよ。 (図 6、図 7)

継続は力なりというが、名場面プレートの制作を通して培われて行っただ技術が、「絵を彫る」であった。この「絵を彫る」が更なる YUHIRO 独自の商品開発の土台となって行く。

でも、これをやった切っ掛けで、「絵を彫る」っていうのが出来て、ここから派生して、今の、やり始めようとしているのが、「動物を彫る」、「写真を彫る」です。こういう風な…。

言われて改めて見直すと、目の前には動物のプレートが飾ってあった。文字通り、「ああ、なるほど」と反応する私がいた。映見が「動物を彫る」、「写真を彫る」の説明のため、さらに詳しく話してくれた。

この、かわいいペットの写真を、瓦プレートにするという事で…。

発展形です。最終的にはペットも、ま、メモリアルというんですかね。生きている子には写真の代わりにプレート。亡くなったのには、お墓の代わりに。こういう自分の飼っていた犬とかを、はい。

それで、まあ、あの、葬式場とかに持って行ったりだとか。あとはお寺さんとかに話を持って行ったりして、こういうペットの葬式とかイベントをされるところに、「こういうモノをやりませんか」という話を持って行ったりしてますね。

映見は技術的な事も話してくれた。素人からすると、絵も写真も同じように思えるが、「写真を彫る」話になると、また更なる技術が要求されるのである。

ただ、絵と違うのは、写真っていうのは似るか似ないかがすごく難しいんですね。もう写真を似せるというのは本当に難しいです。

絵はもう線が決まってるんで、その通りに彫ってけば出来るんですけど、写真って、線があるわけではないので、本当に出来るかどうかは難しいんですけど…。

この「絵を彫る」技術の発展形としての「写真を彫る」、「動物を彫る」が生まれた誕生譚について映見は語っている。まず、生みの親は映見である。誰のアイデアで生まれたのかと尋ねたのだ。

それは私です。

この直ぐ後に誕生譚が続いた。

それこそ、鬼滅の刃から始まって、絵を彫

るという事をやったんですけど、写真ってのを彫ったことはなかったんで…。

「ちょっと一枚、写真を彫って見たいな」って事で、あの一、うちの（伊達屋）従業員の子の、あの、あの、今飼っている猫さんの写真を頂いて、それを彫ってみたら、ま、従業員の方が、「すごい！」って喜んで下さったんですよ。（図8）

この猫の「写真を彫る」が切っ掛けで、映見は次の段階へ進んだ。

「あっ、そんなに喜んでくれるんだったら、他にもいろいろ作って見よう」という事で、いろんな写真を彫って見たりしたら、意外と皆さんが「いいよ」、「良いよ」って言って下さったんで、「じゃ、それが次の仕事に派生出来るかなー」という風には考えたんですね。

また、偶然のような出来事もこのアイデアの追い風になっていた。



図8 写真を彫る / 動物を彫る I（上：写真 下：動物プレート）

私たちもペット飼ってるんですけど、この夏（2022年）に亡くなったんですけど、こういうモノ、貼ると良いな」って。瓦って、もちろん外に置いていても大丈夫ですし、家の中にあっても大丈夫ですし…。

お墓って、今、宅墓って流行ってって、「おうちの中にお墓を置きましょう」っていうのがあるんだけど。

あまりにもお墓だと、気分がウーンってなるかもしれないけど…。エッっていう感じで

こうやって置いてあると、そんなにお墓っぽくもなく…。立てるものも作るんですけど、その中を削って、中にこの子たちの思い出の品みたいなものを入れるように…。

うちの子だと、亡くなった子は、この毛をちょっと切ってそれをカプセルに入れて取ってあるんですけど、そういうモノを…。（図9）

鬼師は鬼瓦を作るのが仕事である。そして、その鬼瓦は立方体を成している。それが日本



図9 写真を彫る / 動物を彫るⅡ（上：写真 下：動物プレート）

の伝統的な鬼瓦である。その鬼師の技を平板の粘土プレート上に応用したのが、「絵を彫る」である。それは、ある意味、鬼瓦の先祖返りとも言える。六世紀以降、大陸から伝わって来た鬼瓦の祖先にあたる原型は、元々、平板上のものだったからである。その平板に彫られていた模様は、鬼ではなく、蓮華や龍が主流であった。その飾り瓦の模様のもとなるものが、現代の鬼のような模様（鬼面）に変容し、平板状から立方体へと盛り上がって行ったのは、鎌倉時代後期から室町時代（13世紀～14世紀）頃の出来事である。（高原2010）

YUHIRO で起きている事は、言わば、鬼師の世界における温故知新的な動き（故きを温ねて新しきを知る）という事が出来る。そして、立方体の鬼瓦が主流の現代において、「古代鬼面的」で、且つ、「現代的な鬼瓦」を、つまり模様を「今」（アニメなど）に切り換えて、平板上に創作し続けているのだ。ここで映見の言葉に切り換える。

立体ではないけれど、絵みたいなものを作ろうと思ったら、彫るという技術が必要なんだという事も思いましたし。だから、それは本当に、鬼滅の刃で学んだ感じでしたねえ、はい。

何か新しい分野っていうか、モノを創って行きたい。で、他の方がやってらっしゃらないモノをやらなきゃいけない。

あの、同じ事やってたら、真似事にもなりますし、結局、市場をお互い戦って、取り合いになってしまう。それはすごく避けたいんですよ。

なるべく、他の方とは競合しないような方法を取って、自分たちにしか出来ないものをやろうと思った時に、私の得意分野は絵

を描くことだから、それを、こういう風にやって行けたら良いんじゃないかなって、…と思いました。

異業種コラボ：有松絞りと

2022年9月の事である。たまたま、中津川市にあるラジウム温泉の休憩室でテレビを見ていた。すると、「まるっと岐阜！」というNHKの番組があり、何と、有松絞りと三州瓦のコラボを紹介しており、YUHIROの伊達由尋がテレビに出演していた。「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボの時も、最初にその事を知ったのは、地元の飯地に住む知人宅でのテレビであったことを思うと、何か、ある種の不思議さ（縁）を感じざるを得ない。「エーっ、有松絞りとコラボしてるのかー！」と感心して見ていた記憶がある。実際には、有松絞りと三州瓦のコラボは既に二回行われている。どちらもコラボのタイトルは同じで、「「絞」・「瓦」灯りストリート in 有松」となっている。一回目は2021年8月7日（土）～11月14日（日）までで、二回目は2022年9月3日（土）～10月2日（日）であった。場所は愛知県名古屋市緑区有松であり、江戸時代の東海道五十三次鳴海宿の東にある、もと茶屋集落で、有松絞り発祥の地でもある。一回目は三か月の長期に亘っているが、有松の中で、西町（8/7～9/10）、中町（9/11～10/15）、東町（10/16～11/14）と移動してコラボを開催したからである。二回目は中町近辺を中心に行われている。有松は古い街並みを現在もお保っている。その街並みの核となる瓦屋根を持つ日本家屋が、三州瓦ととても相性が合うのだ。2022年のコラボのチラシには次のように謳われている。

名古屋市で初めて日本遺産に認定された有松の町。江戸時代に絞の一大産業地として栄えた町でしたが、天明4（1784）年の

大火災により町のほとんどが焼失し、それを機に多くの建造物が三州瓦屋根に覆われました。それ以来、有松にとって「絞」と町を守ってきた「瓦」は欠かせない存在になりました。

そんな「絞」・「瓦」を、伝統技術を受け継ぐ染色家と鬼師がコラボし、新しい灯りのオブジェが有松の夜を温かく彩ります。

つまり、天明4年以前は有松の町は草葺き屋根を持つ家屋であり、その大火災の後に、瓦葺き屋根の家屋に建て替えられたことになる。それ故に、「瓦」が町を守ってきたわけである。またそれ故に、「瓦」が「絞」を守って来たことにもなる。また第一回目のコラボは2021年第14回産業観光まちづくり大賞において、「観光庁長官賞」を受賞している。ただ中心となっているコラボ参加者は、有松側が(有)久野染工場、兼、コンソーシアム有松の代表、染色家の久野剛資^{つよし}であり、三州瓦側は、(株)伊達屋、YUHIROの鬼師(伊達映見、伊達由尋)であることだ。いわゆる「鬼滅の刃」と「鬼師」とのコラボほどの爆発的な広がりや影響力はそこにはない。しかし、既にこのコラボは二年継続して行われている。また全くの異業種とのコラボというよりも、伝統的工芸品として両者とも、国から正式に認定された産業という点において、強い繋がりを持っている。

それ故に、近隣の、他の伝統的工芸品繋がりや、更なる継続・拡大の可能性を秘めているのは事実である。広がり方に「絞」・「瓦」のコラボの場合は、「鬼滅の刃」とのコラボと比べて違いがあると言える。

まずはそのコラボの始まりについて尋ねてみた。つまり、何が、どういう風な経緯^{いきさつ}で起こったのかという事である。私の前で聞いていた映見が次のように話してくれた。

その頃の、碧南信用金庫さんの、次長さんになるかなあと思うんですけど、…その方が有松の方に転勤になったんですよ。

丁度有松支店に転勤になって、「有松の方では、有松絞りを使った何かで町を盛り上げたい」という気持ちがあり、「高浜は高浜で、瓦の何かで盛り上がりたいたい」という気持ちがある。その気持ちを繋げたい。

で、思ってた下さって、有松の方に、「三州で、すごい職人さんで、いろんな事やってる職人さんいるから、繋げてあげようか」という話になったんですよ。

で、「あ、うん、行きたい」となって、有松の町を盛り上げたいと思ってらっしゃる久野染物工場の久野さんという方が、はい、「一回、伊達さんとこ行ってくるわー」という感じで、お電話いただいて、もう、自分の足で、ここまで((株)伊達屋)来て下さって…。

で、いろいろなものを見て、「僕は有松絞りだけじゃなくって、瓦とのコラボで、町を盛り上げたいんだよ」と言って下さって。…じゃ私たちも、その気持ちを汲んで、「やりたい」という事で…。

「日本の伝統的工芸品同士で、はい、何か盛り上がる事が出来ないかな」という事が切っ掛けで始まったんですけど。

この話からも、異業種間繋がりや、ちょっとした別の異業種の人の仲介や繋がりによって、事が始まるのかなと思われる。ただ、ここで、繋がりやの元(因)を作ったのが伝統的工芸品であったことを知り、驚いたことは確かである。「鬼滅の刃」の時のコラボも始まりは、やはり伝統的工芸品であった。(高

原 2022) 伝統的工芸品であることが、一つの、ある意味で、産地の ID カードのような身分証明書となり、全国の伝統的工芸品の間に、ある種の組合意識のようなギルド (guild) 感覚が形成されているのだ。そして、この意識は出会うと当事者同士の結束の強い要因となる。「このイベントは正に異業種コラボですね」と映見に言うと、映見は次のように話すのだった。

「本当に、異業種コラボですね、全く」。久野さんがおっしゃるには、今、有松ではいろんな業種の方とコラボがあるんですよ。で、その中で、瓦のコラボに力を入れて頂いてるんですけど…。(図 10)

その異業種の方たちとも、瓦を繋げて頂いて、「最終的には有松を中心にして、いろんな伝統的工芸品で、大きなコラボのお祭りが出来る様にしたいな」っておっしゃってらして。

ま、例えば、美濃でいう和紙、美濃和紙の灯りのコラボを特に入れて来ると、美濃和紙と瓦と有松絞りのコラボが出来るだとか…。

ま、いろんなそう言うモノでやって行ける切っ掛けが出来ればなという風には思っていらっしゃるみたいで、非営利団体のコンソーシャル有松という団体を立ち上げまして、そちらの方で、今、広げる切っ掛けをドンドン作ってる状態ではあるんですけど…。

このように伝統的工芸品が、一つ、また、一つと、手を繋げて行ければ、伝統的工芸品サミットのような形の祭りを最初は有松中心で始め、いずれは G7 サミット式で、いつかは各地持ち回りで広がって行けば、伝統的工芸品のネットワークが形成され、工芸品自体の活性化も起こって行くものと思われる。伝



図 10 「絞」・「瓦」灯りストリート in 有松：有松絞りと三州瓦のコラボ

統的工芸品サミットの話をする、映見はすぐに反応してくれた。

どうしても自分たち、瓦もなんですけど、自分たちの世界だけだどうしても「井の中の蛙（大海を知らず）」で終わってしまうんですけど…。

いろんな所がドンドン手を広げれば、もっと広がるし、その中で得意分野を使って、…私たちが不得意な分野のところは得意分野の人とコラボすれば、またいいものが出て行きますし…。

そういうのをやって、「自分たちの伝統とか技術を守って行ける切っ掛けを作りたい」というのが、このお祭りの切っ掛けでしたね。

日本の各地にある伝統的工芸品が「井の中の蛙」で終わらずに、コラボレーションを通して「大海」を知る道筋が出来る様になれば、職人同士の交流が生まれる。同時に、他地域の人々が他地域の伝統的工芸品の存在を直に知ることにもなる。「伝統的工芸品」自体の活用とその捉え方の刷新が「伝統的工芸品」の活性化に繋がることが見えて来る。映見のこの件に関する考えを紹介する。

多分、伝統工芸（伝統的工芸品）も行き着く所まで行き着いていると思うんで、それを次に広げて行く為にはコラボレーションというのが一番いいと思うんですよ。

それ（異業種の人とのコラボ）が伝統的工芸ではなかった場合、ただのアイデアを出し合った何かのチョットしたイベントになると思うんですけど…。

伝統工芸という名前が在るからこそ、日本

全体で守ってくれるというのも有ると思いますし、だから私たちも抜けやすいって云うんですかね…。

ただ、ただ、伝統工芸品って名前が在れば、儲けが出るとか、そういう考えではなく、「伝統工芸」が日本の伝統を守るところが一番大事だと思っています。

「伝統的工芸品」に認定されて、そのラベル（認証票）を正式に付けることが出来る。認定を受けたことで、日本の伝統として、国が、地域が、そして、人々が、さらには各伝統的工芸品の直接の担い手である職人が、その伝統を誇りに思い、守りながら、次世代の担い手を育てていく循環の確立が急務であろう。特にこの現代に於いては。コラボレーションの波を「伝統的工芸品」の間に波紋の様に広げて行くことが、一つの活性化の突破口を開くことに成るのかも知れない。有松「絞」と三州「瓦」のコラボレーションはそこに至る道（ストリート）を照らす灯台の「灯り」とも言えよう。

まとめ

ポスト・「鬼滅の刃」と「鬼師」を主題に、(株)伊達屋の手作り鬼瓦部門である YUHIRO について、現地調査を中心に見聞を広めて行った。実際に、あの爆発的、大成功裡に終わった「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション（2021 年 1 月 29 日）から後に、YUHIRO は一体どうなって行ったのかについて、それを三つの動きとして捉え直して検討を加えてみた。三つの動きには共通性が存在しており、YUHIRO の特徴や性格を示している事が見えて来る。三つの動きとは、1)「ジブリパークへ」、2)「絵を彫る」、3)「異業種コラボ：有松絞りと」、の事を指す。それぞれが独自の活動を展開しており、その一つだけでも、

創造的で、発想がユニークで、且つ実際に行動に移している点において、プラグマティック（実用／実際）的なのだ。そして、それら三つの動きの背景にある考えがどれも未来志向型である事だ。開放型の思考を常にしているとも言えよう。

1)「ジブリパークへ」では、2020年10月30日に始まった「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションに全力で取り組んでいたYUHIROが、2021年1月29日のコラボ終了後、半年間で作り上げたジブリ・プレート32枚の話を紹介している。ジブリ・プレートは「鬼滅の刃」とのコラボで培った「絵を彫る」技術をアニメ制作会社であるスタジオジブリ（通称ジブリ）が作った数々の宮崎駿（アニメーター／漫画家）によるアニメ作品の中の場面に粘土板に彫り込んだものである。このジブリ・プレートを2021年8月6日にYUHIROを訪れた時に見たわけである。そして、次に2022年12月13日に再度、YUHIROに来た時にはジブリ・プレートはそこにはなく、何と、「ジブリパークへ」移っていたのだ。ジブリ・プレートはもちろんYUHIROが生み出した鬼滅の刃の「名場面プレート」の発展形である。あの過熱した「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボが終わって、すぐに次のアニメへ創作意欲を切り替えることに成功している。まるで、「鬼滅の刃」とのコラボはアニメとのこれから始まる第一幕に過ぎないかのような姿勢に未来志向型のYUHIROを見るのである。

2)「絵を彫る」はYUHIROが鬼滅の刃「名場面プレート」の制作の中から鍛えた彫る技術の総称である。もちろん、実際の中身の技術はYUHIROのみが知っている。YUHIROはこの技術をまずジブリ・プレートに適用した。その成果は様々な人に認められ、最終的には現ジブリ監督の宮崎吾朗が激賞し、ジブリパークへと移って行ったのである。YUHIROはここで終わらせていない。「絵」

から「写真」へと発展させて、「絵を彫る」を「写真を彫る」に切り換え、進化させている。身近な動物（特にペット）が亡くなった時に起きる喪失感への安らぎとして動物プレートを創作し、家に飾ること（宅墓）を考案／提案している。ここにもYUHIROの過去に囚われる姿勢ではなく、未来志向型、開放型の思考が生きている事が見えて来る。

3)「異業種コラボ：有松絞り」とにおいては、YUHIROの未来志向型、開放型思考が全開している。これは異業種である有松絞りとのコラボレーションゆえに、事実上、「鬼滅の刃」とのコラボレーションと構図は同じである。しかも、個人的な話ではあるが、私自身がこの二つのコラボが行なわれている事を知ったのは、どちらもテレビの番組を実際に見た事が発端になっている。マスメディアがこの二つのコラボを取り上げていたことになる。有松絞りとのコラボは2021年8月7日から同年11月14日まで行なわれている。このコラボはこれで終わらずに、翌年、第二回のコラボが2022年9月3日から10月2日にかけて行われた。この連続性が有松絞りとのコラボの特徴になっている。有松絞りとのコラボが重要なのは、「有松絞り」と「三州瓦」は異業種でありながら、深い所で繋がっている点にある。両者とも伝統的工芸品の認定を国から受けている事である。この事の意味は大きい。伝統的工芸品指定品目一覧[都道府県別]には有松絞りは「有松・鳴海絞」で登録されており、三州瓦は登録名が「三州鬼瓦工芸品」となっている。どちらも愛知県であり、その愛知県には15の「伝統的工芸品」が存在する。東海地方になると29もの「伝統的工芸品」がある。日本全国で240の「伝統的工芸品」がある。（2023年7月2日現在）つまり、「伝統的工芸品」が鍵となり、今は、有松・鳴海絞と三州鬼瓦工芸品とのコラボであるが、将来に向けての拡大・拡充が期待できるわけだ。未来志向型ならではの企画という事になる。

以上、YUHIRO の三つの動きをポスト・「鬼滅の刃」と「鬼師」における YUHIURO の特異な活動として捉え、(株)伊達屋—YUHIRO の根本的な特徴を考察したことになる。映見と由尋が他の鬼板屋と違い、女性である事とこの YUHIRO の特徴がどのように関連しているのかは今後の調査に譲りたい。

参考文献

- ・ 吾峠呼世晴 2017 年 -1 『鬼滅の刃』8 巻
集英社
2017 年 -2 『鬼滅の刃』9 巻
集英社
- ・ ウィキペディア「ジブリパーク」<http://www.ja.wikipedia.org/wiki/ジブリパーク>
2023/6/22 参照
- ・ 経済産業省伝統的工芸品指定品目一覧〔都道府県別〕 <https://www.nmeti.go.jp>press>2022/11> 2023/7/3 参照
- ・ 高原隆 2023 年 -1 「新・鬼師の世界—周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」—(株)伊達屋—YUHIRO I.」愛知大学総合郷土研究所紀要 第 68 輯：19-40.
2023 年 -2 「新・鬼師の世界—周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」—(株)伊達屋—YUHIRO II. [I]」文明 21 第 51 号：25-51
2024 年「新・鬼師の世界—周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」—(株)伊達屋—YUHIRO II.[II]」文明 21 第 52 号：95-122.
2022 年「新・鬼師の世界—周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション—はじまり」愛知大学総合郷土研究所紀要 第 67 輯：33-54.
2010 年『鬼板師 日本の景観を創る人々』あるむ